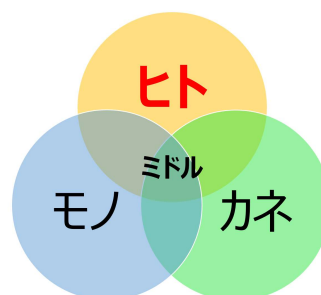


ヒト その5「公正無視」「恪気応変」

企業経営漫談士 岡野実空

ここまでの付録は、ミドルを取り巻く人々の意識や行動から、間接的にそのあるべき姿を考えてきました。今回はその総括として、直接的にミドルが犯してはならない禁忌を取り上げます。それは今後絶えず付きまとい、さまざまな場面で皆さん自身の「人間力」をテストし続けます。くれぐれもその強化を怠りなく！



⑨ 公正無視

『公正』は、判断や行為が偏らない「公平」に加え、「正しさ」にも重点を置きます。また「無私」とは私利私欲がないことですが、今回は逆に、それを『無視』することへ警鐘を鳴らします。

さて私たちは、規範や規準をよく守る民族として世界に知られています。それが同調圧力に依りがちという難点はあるものの、外国人には奇跡に映るスクランブル交差点が、世界の名所になったのもその証です。ところが「正解」や「模範」がない課題に直面すると、それが一転弱点になります。実際いま、明治以来の「脱亜入欧」路線が行き詰り、独自の「モデル」創出が求められるさまざまな分野で、多くの集団が思考停止に陥っています。

いま私たちが関わる事業における「正しさ」とは、組織の「目的」とそれに至る「手段」に対する、株主や社員に偏らない、すべての利害関係者から見た「妥当性」を意味します。そのため、組織の「目的」とその具体的な「目標」の合意には、たっぷり時間とエネルギーをかけねばなりません。そして次は、その「過程」と「手段」の議論。また「意思決定」の要所と仕方を決め、その遵守をもう一つの「正しさ」とする事前の承認が極めて重要です。

しかし「公正」も「無私」も、私たち凡人にとって至難の業。できるのは、「利己」を極力抑制し、「利他」の部分を増やすよう努力することだけです。そのため、色々な人から話を聞き、様々な立場で考えましょう。それが関係者の「妥当性」だけでなく、「納得性」にもつながるからです。最後に、そのお手本だった外交評論家・岡本行夫氏の新型コロナウイルスによる急逝を悼み、合掌!!

⑩ 恪気応変

『公正無視』の二大要因、「嫉妬」と「怨嗟」。今回の『恪気』とは、その前者で「やきもち」のこと。また「応変」とは本来、変化に「適切」に対応することですが、ここではそれと真逆の判断や行動を意味します。つまり『恪気応変』とは、やきもちによって「臨機応変」な行動がとれなくなることです。その主役である「男の嫉妬」については、先のシリーズ(E-19)でも取り上げました。

その一方、個人の卓越した営業力でマスコミの寵児となり、某流通企業トップに就任して、勘違いした女性悪役も10年前に実在しましたが、当時はあくまでも例外扱いでした。しかしその後の数値目標による濫造に伴い、悪役の女性比率も次第に高まっています。そのためいま、「臨機応変」ではない、その根本的な対策が求められています。

その要諦は、「他山の石」。他人のさまざまな言動を素材として自分の人格を磨くこと。その「内省」の習慣をもたないミドルを、被害者が激増する、それより上の地位に就けてはなりません。

さて原語の「臨機応変」とは、豊かな教養と経験を基礎に、自分なりの「思想」を持つ人間だけに使用が許される言葉。しかしその方々は決して使うことがなく、実際の場面では、「基本的な考え方」と「具体的な行動」を明確に示すのです。

またいま「臨機応変」に代わり、頻繁に使われる表現は「ケース・バイ・ケース」。本人は「柔軟性」を強調しているつもりでしょうが、どちらも自分に「芯」となる「思想」がなく、「場当たり」的な対応をとる意思表示であることをお忘れなく！

2020年5月18日 仏教実空